

文：山平有紀 Yuki Yamahira

北海道人物伝

北海道庁とエア・ドゥが、歴史の旅へご案内します 〇其の二

海底に眠る幕末の軌跡に
半生をかけて挑む

「開陽丸の話を知りてくれるまで絶対に諦めない姿に、職場では『スッポン』とあだ名が付きましました」。そう笑いながら開陽丸との50年にも及ぶ「奮闘」を語る、江差町の元教育長・石橋藤雄氏。ことしで90歳を迎えるが、今も仕事と向き合う時の自分は、子供のころ、親元を離れ雑穀店に年季奉公した当時へ



江差の海底からよみがえった、幕府の軍艦・開陽丸 石橋藤雄

いしばしふじお

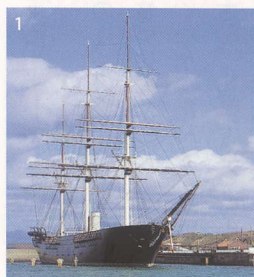
のままだという。石橋氏は尋常小学校を卒業後14歳で奉公に入り、3年間「人の何倍も働く根性を身に付けた」という。この粘り強さが後に、海底で朽ち果てるはずだった開陽丸の運命を変える。開陽丸は、幕末の戦乱期に榎本武揚率いる幕府の軍艦として登場する。新政府軍が旧幕府軍に江戸城の明け渡しと軍艦の引き渡しを要求した際にこれを拒み、幕臣を乗せて蝦夷（現・北海道）へと北上。戊辰戦争の重要な戦力とな

るはずだったが、江差沖で「タバ風」と呼ばれる暴風に遭い、沈没した。その後武器や、戦時中は貴重な金属を目当てに何度か引き揚げ作業が行われたが、膨大な経費に見合う遺品を回収するのは難しく、いつしかその史実だけが語り継がれるようになった。江差港に完成した「開陽丸青少年センター」江差で生まれた石橋氏も、幼いこ

るを発見。その後、引き揚げられた遺品の数は32000点を超えた。石橋氏は「今も船体の一部が海中にあるので、やり終えたという実感はない」と話しているが、現在江差港には、全長72.8m、3本マストの開陽丸の原寸大の展示施設「開陽丸青少年センター」が、江差のシンボルとして堂々とした姿を見せている。石橋氏の半生を懸けた仕事は、間違いなく江差に新しい歴史を築いた。

Episode 「幕府の埋蔵金」騒動もあった興味深い船の積み荷の数々

「幕府の埋蔵金が積んであったらしい」といううわさもあった開陽丸。実際には、鉄に真ちゅうでメッキした偽の金塊が引き揚げられ、「分銅か偽金か」と話題になった。この他当時オランダで最新鋭の木造蒸気船として造られた船からは、電信機や双眼鏡、楽器、江戸時代の古銭や古文書など、西洋の技術と江戸文化の双方を映し出す物などが見つかった。



1. 「開陽丸青少年センター」
(江差町姥神町1-10、入館料大人¥500、小中高生¥250)
2. 沈没地点が見える場所に建てられた
「開陽丸終えんの地碑」(江差町中歌町193)

参考文献：『幕末・開陽丸(石橋藤雄著・光文堂刊)』ほか

Profile

1924年6月北海道江差生まれ。尋常小学校を卒業後、年季奉公を経て江差町役場に勤務。1971年同町の教育長に就任後、多くの関係者の協力を得て日本初の水中考古学といわれる開陽丸の調査に取り組む。1988年退職し、開陽丸青少年センター理事などを経て、現在も江差町の歴史に関わる会の代表を務める。今後やってみたいことは、開陽丸の進水式の祝賀会のメニューを再現し、多くの関係者と味わうことだという。

AIR DO INFLIGHT MAGAZINE

rapora

[ラポラ]

AIR DO

May 2014 No.120

5

ご自由にお持ち帰りください

rapora special

ふっくら もちもち

道産小麦パン



AIR DO就航都市巡り049—宮城県●白石市

伊達家重臣 片倉小十郎の城下町・白石へ